

死の流域

水上 勉

角川文庫



昭和四十三年一月二十日 初版発行
昭和五十三年四月二十日 十八版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

し りゅういき
死の流域



著作者

水^{みな}上^{かみ}勉^{つとむ}

発行者

角川春樹

印刷者

中内佐光
東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
①一〇二②③一九五二〇八

株式会社 角^{かど}川^{かわ}書店^{しょてん}
電話東京(265)三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

暁印刷・多摩文庫

0193-125609-0946(3)

死　　の　　流　　域

水　上　勉



角川文庫

2484

一

北九州の英彦山^{ひこさん}から流れる遠賀川^{おんががわ}は、いくつもの岐流をあつめて、黒いボタ山と、灰いろの鉾害田圃^{たんぼ}のつづく小平野を縫い、いわゆる筑豊炭田地帯の都市や山野をゆっくり眺めながら、玄海^{げんかい}灘^{なだ}にそそいでいた。

この遠賀川の上流に志能川^{しのがわ}という小さな町があった。町は二年ほど前、すなわち、この物語のはじまる前年ごろに、附近の小村落を吸収して「市」に昇格した。もともと大手炭鉾の少ない、群小炭鉾業者の跋扈^{ばうこ}する小都市であった。人口四万二千。戸数八千二百戸。ほとんど、英彦山のふもとに近く、志能川という岐流が遠賀川と合流するT字形地点にひらけた小盆地にあった。

筑豊のどこにでも見られる風景は、川とボタ山と「炭住」とよばれる長屋である。どの川も水は汚れていた。家々の屋根もまた黒く、鉾害のために樹木一本とて生えていない灰いろの山裾^{やますそ}に、へばりついたように、トタンぶきやまさぶき屋根のひしゃげた姿をさらして列をなしていた。炭塵^{たんじん}に被^{おお}われた町全体は、風が吹きすさぶと、空も野も鼠いろに彩色^{さいしき}された。

一年のうちで、もっとも空気の澄むのは冬であった。三角型のとがった頂を、白布をのせたような白雪に被われて立っているボタ山の重なりに向こうに、ひととき高く聳^{そび}えてみえる英彦山の姿は、晴れた日などは絵のように浮いてみえた。夜になると、山の傾斜にならんだ炭住の窓々の灯が、何列もの列をなして、下を流れる遠賀川の水面に映じていたが、これは東京に住んだこと

のある瀬尾さよには、灯籠流しの隅田川の宵を思い描かれなくてもなかった。

しかし、そんな風景も、この町が市に昇格したころの活気を呈した時分のことであって、事件のはじまった昭和三十×年の夏は、山裾の炭鉱住宅からは、そんなにたくさん灯はみえなかった。閉山や廃坑を告げる鉱区が日に日に増えてゆく時節だった。

約半世紀ばかり、日本産業の動力である石炭の半分を掘り起こしてきた筑豊炭田地帯も、政府の方針である石炭合理化案と、炭層自体の枯渇が原因して、不況ぶりは底をついていた。

志能川市もその例にもれない。常時百人以上を雇傭する炭鉱の中で閉山を告げたものは八鉱山、百人以下の小炭鉱の事業停止も加えると、十二、三件に及ぶとその頃の数字は示しているから、昭和三十×年の夏は、まだまだ不況がつづきそうであった。離散して他の鉱山都市に移住してゆく人と、そのまま閉山の住宅に居残って、形骸の中から骨でも拾うみたいに、ボタ山や、川底から、まだ燃える炭粉をかき集めて、たどんをつくる業者などに日傭人夫として傭われて行ったり、公営の福祉事業に傭人として働くなどして、細々と生活する以外には、古くからこの町に住んでいた商人と鉱害田圃や畑を守りする農家ばかりであった。市の人口はひと頃に比べると三分の二に減少したといわれている。

浅野口という三百人ほどの鉱夫の働いている鉱山がまだ活動していた。志能川と遠賀川の合流点から、約五百メートルほど志能川溪谷に入りこんだ地域にある炭鉱だったが、この岸べりの共同長屋に住んでいる瀬尾さよの家の母親ちかが、九月十二日の夜八時ごろ、長屋の共同便所の格子窓から、何げなく外の風景を見ていた。

川ぞいの小高い丘の上に立っている長屋だったから、眺望はきいた。丘からだらだら坂を下りるようにして、浅野口炭鉱の坑口近くまでが、月の光で一望できた。車輪の跡のついた白い道がよくみえた。坑口の近くに石段があって、そのとっつきに、会社の二階建てのコンクリート建物があり、一階の労務課の部屋だけに灯がともっている。選炭場や、坑外トロッコの動く音は止んでいたが、それでも、二番方が坑内に下りている時刻なので、地底の方でエンドレスの巻きのきしる音が、坑口から外の空気に吐き出されてくる。耳なれた住宅のあたりまで、それはかすかに空気をふるわせて届いてきていた。

用をすませた瀬尾ちかが、便所を出て、タタキを通過して家に入りこもうとしたときだった。ふと、白い道の上を、黒い人影が前かがみになって坑口の方から走ってくるのをみとめた。その影は、見なれた人影とはいえなかった。黒ズボンに、黒いジャンパーのようなものを着ていた。つまり、労務課の者や、仕事を終わった一番方の者であつたら、見なれているから一見してちかの眼にもわかつたのであるが、風体は他所者のように見うけられたことである。ちかはおや、と思つたが、しかし、このかすかな疑問は彼女の白髪頭の中で数秒間かすんだように宿つただけである。すぐ消えた。黒い人影は、黒い建物の蔭に一時のうちに吸われたからであつた。

瀬尾ちかは六軒長屋の第一棟の三番目にある自家の古障子をあけて土間に入った。新聞紙を貼つた襖とも障子ともつかない遮蔽戸の外から、

「さよ、寝たか」

とちかはいった。六畳と三畳しかない間取りである。六畳の方に、息子の仙吉の嫁のときと、

仙吉の妹のさよは寝ている。うす暗い五燭光の裸電球の下から寢息がきこえるだけで返事はなかった。ちかは三畳に上がった。孫の幸吉の寝ているわきへ、しずかにちかは横になった。そのとき六畳の方をみた。と、ときもさよも、掛毛布を足もとにまるめ、ときは腰巻の裾をはだけ、ぶざまに股またをひろげて寝ている。ちかは孫の幸吉が臍へそを出しているの、ボロ布のようなものを腹にかけてやった。そうして間もなく自分も眠りについた。寝入りしなに、かすかに、また白い道を走った人影が頭をよぎったが、それははっきりした知覚とはならないで、ちかの頭に泡つぶのようにうかんですぐ消え去っていった。

夜中の十一時三十分ごろ、排気坑を掘鑿くつさくしていたハッパ係の寺島伊助が予定の四メートルぐらいを掘り終わって、坑内にある沢の谷詰所から、地上にある会社の労務課に電話した。

「いわれたしこ掘りあげたばって、あがってもよかな」と彼は問うた。よか、という返事があった。寺島は二番方だった。二番方は午後七時から午前三時までが坑内作業の時間である。一番方は午前六時から午後二時まで働く習慣になっている。二番方の寺島が、十一時三十分命令された分を掘りあげたから外へ上がってもいいか、と労務課に問うているのは、つまり、普通の日よりも三時間半ほど早く上がることになるからだ。珍しいことではあった。普通、中小炭鉱の鉱員で、安給料をカバーするために時間外作業をする者が多いのに、この日にかぎって、寺島伊助は腹痛の気分もあって、早目に上がっている。

「よかたい、上がって来ないや」

と労務課員の返答が二どあったので、寺島伊助は受話器をおき、掘進夫の山本、運搬夫の中村の二人をつれて、排気坑を下った。傾斜が十四度から十七度の坑内道である。六片の坑道をエンドレスの炭車にのり、そこから人道^{じんどう}卸しの巻炭車に乗りかえた。百メートルほど地下にもぐったあたりである。ひどく薄暗い。そこから上がってくる途中だった。坑口まで約三百メートルほどの地点の左側の壁をみたとき、水がふき出ているのが見えた。この水はまるで、水道の蛇口^{じやくち}からとび出ているように勢いよく出ていた。ハッパ係の寺島は坑口に出ると坑口詰所で炭車を下り、ここで伝票を切ってもらいながら、

「水の出とった。音のひどかったね」

といった。詰所の保安員はキャップランプの下でギロリと眼を光らせている寺島の、驚きと腹痛とがいっしょくたになった苛^{いら}だった汗まみれの顔をみた。彼は十一時五十八分という伝票記載を終えると、自分も坑口の方に耳をすました。シュシュドウドウというような音がきこえた。

保安員は顔いろをかえた。ハッパの寺島と一しよに会社の石段をかけ上がった。労務課の室には夜勤の採鉱主任の菱田^{ひしだ}が机に向かつており、小型ラジオからひっぱったイヤホンを耳につけて眼をつぶっていた。彼は足音で眼をさますと、二人の報告をきいた。みるみるうちに蒼^{あお}くなつた。時計はちょうど十二時である。

菱田健三郎は寺島伊助と保安員をつれて出水地点に走って行った。漆^{うるし}のように光った炭壁が大きく角だつて口をあけていた。水は奥の方に空洞でもあるのか、どうどうとほとばしるように、音をたてて坑内に流れこんでいる。もう、かんたんなことでは防げそうにもないことが判った。

菱田はすぐさま労務課に引き返した。坑内電話で、池の谷詰所を呼び出した。不思議なことに、電話はかからなかった。相手の方で、受話器をあげたままにしているような気配であった。菱田はいらいらした。坑内は二つの作業場に分かれている。菱田は沢の谷詰所に電話をかけた。すると、これはすぐに通じた。

「人道卸しのな、三百メートルぐらいのところでな、炭壁がばれて出水しちやる。仕事ば止めて、すぐ本卸しから上がりない」

と、唸鳴る^{どな}ように菱田はいった。全員昇坑の命令は、ふつう、鉱業所長、鉱長の許可がなければ出来ないことになっている。しかし、菱田健三郎は事態のただならぬ状況を見てとって、単独で緊急避難命令をだしたわけである。

外は大騒ぎになった。労務課から四人、保安詰所から三人の若い男たちが出てきて、坑口と出水箇所の間を何でも入ったり出たりしていたが、誰もが早く地底から全員が上がってくるのを期待していた。菱田は念のために沢の谷の詰所に再度の電話をかけている。

「池の谷の方に電話は何ほかけても出てこんけん、そっちから連絡ばしてくれ」

鉱員が地底へ出入するには、必ず人道卸しを使うのが習慣になっている。本卸しは石炭専用のエンドレス道である。菱田採鉱主任が、鉱夫たちに本卸しを利用して上がってこいと命じたのは、まだろっこしく感じたためと、全員昇坑の時間の問題を気にしたからである。電話の通じない池の谷の詰所の方には、すでに沢の谷から連絡が走ったはずだと見込んでいた。池の谷は沢の谷よりも坑道が深くなっていた。最先端の切羽^{きりば}までは千メートルもあった。しかし坑口近い出水箇所

の水が、千メートル向こうの切羽に届くまでは相当時間がかかると主任は踏んだのだ。

地底の沢の谷詰所の二番方の中から、六人の者が六片道を通って深い池の谷に向かっていった。

「古洞の壁ん割れて出たにきまっちゃうるばい」

と誰かがいった。古洞というのは、炭層のあるこの地帯を掘鑿した旧坑のあとを、口だけふさいで空洞のままに地底に眠らせておいた、つまり古坑のことである。そこに水がたまっていて、ときどき新坑道の壁とぶつかった場合は出水をみることがあったのだ。

「こまか古洞じゃけん、心配はなか……」
と相槌あいづちをうつ者がいた。

十二時ごろ、志能川土堤どてのバス停留所から五十メートルほどはなれた一軒家の熊田という家が、激しい物音とともに大きく地底からゆすぶられ、棚の物の落ちる音がした。寝ていた家中が眼をさました。

「お父ど、何じゃ、ふとか音がしたけん、地震じゃなかばい」

長男が起き出してみると、窓の外の方から、轟々ごうごうという水音がしている。八日と九日と二日間、雨が降っていたので、志能川の水かさはいつもより増してはいたが、十日朝からはよく晴れていた。水勢もそんなにひどくなかったのに、川の方からきこえてくる轟音は、ただごとではなく思えた。

長男は夜の中を走り出てみた。土堤どてに立ってみるとびっくりした。川底がえぐられたものか、

下手の流れが逆流して、川のまん中に凹部ができ、渦をまいて、そこだけが巨大な穴になって逆巻かれていた。夜眼の中で、濁流は光っている。

「陥没だ……」

熊田家の長男は足もとがふるえた。棚の物が落ちたのは、この陥没の瞬間だったにちがいないと思った。恐ろしいことに、見ているうちにその陥没の穴はひろがった。向こう岸の草の生えた土がろくろを廻すような水勢に次第にえぐられながらくずれてくる。

長男は走ってもどると、父母に報告しておき、自分はバス停留所のタバコ屋の方に大声で叫びながら走った。

「川底の、陥ちたばい」

熊田家が地ひびきのために揺れた時刻から想像して、おそらく十二時前後が陥没時刻と推定されている。しかし、この時はまだ、志能川鉱業所では、川の陥没が、坑内の出水と関係しているとは思っていなかった。陥没場所と坑道とは、約三百メートルもはなれている。川の水が坑道に入りこむことはまず考えられなかったのだ。

しかし、菱田採鉱主任は川底陥没の報を受けると、保安員の苦者に命じて、「見てこい」と命令している。

へひょっとしたら、坑道と川との間に古洞があって、水はその古洞を通過して、坑道の壁を破って出たのではないか……」

この発想は菱田の胸にかなり強く宿ったことではあったが、しかし、彼は保安員の報告を待つ

までもなく、それを打ち消していた。

へまさか、そんなことはあるまい。三百メートルもはなれているんだ……

そんなことがあってはたまらないと思うものがあつたからである。

だが、坑内からは、まだ、二番方は上がってこなかった。外に立って、黒い穴をみつめている連中の顔から、あぶらあせ脂汗がながれ出ていた。

「連絡ば、しちよるじゃるか」

案じられたのは、同じ二番方でも、池の谷の切羽きりば、つまり、千メートル下の地底に作業をしている六十人の鉱員の安否であつた。

そのころ、地底では、右六片を池の谷に向かった転車夫たちは、流れこんでくる膝までの水の中で、立往生していた。百メートルほど池の谷より下つたところで、すでに坑道一杯に充満した水が、下の方から逆流してくるのにぶつかった。ここでも出水箇所があつたのか、水は渦をまいていた。四十年輩の転車夫の一人がその水の中に手を入れ、指にたれた水をすす吸ってみて顔を歪めた。

「古洞の水じゃなかとな」

彼は叫んだ。

「普通の雨だれ水じゃ、川の水じゃなかか」

古い鉱夫には、炭層をもれてくる水をなめてみただけで水質を判断する力があつた。出水かどうかをカンで察知する老人もいたわけで、この男がなめてみた水はたしかに、古洞に眠っていた

水のようにすっぱくてにがくはなかった。渦巻いた水は傾斜角十四度から十七度ぐらいの坑道を川のように流れてくる。水量は川の水だと疑うに充分だった。しかし、地底のことだから、志能川の底が陥没していることは知らなかったのである。

「戻ろ、戻ろ、みんな上がっちゃるじゃろ」

連絡は断念せねばならなかった。本卸しと六片道との交叉点こうさてんに、炭車が停とまっていた。うす暗い中に、車上から奥をみている所長木場俊平、鉦長宇野彦造、企画課長笹森秀次、それに菱田の脂ぎった顔があった。

「どげんふうじゃった」

菱田がずぶぬれの転車夫の一人にきいた。息せき切って、泳ぐようにしてはい上がってきた四十年輩の連絡員がぼつんといった。

「水の、逆流しちよるけん、どもならん、行けんじゃった」

地上の本社屋にあるサイレンが鳴ったのは一時である。五分間連続して、切れることなく鳴りひびくサイレンの音は、月明かりの志能川の夜空をいつまでもふるわせていた。

とびとびに炭鉱住宅の窓があいて、寝ぼけまなこの女たちが、半裸の軀からだを窓々からみせたのはこのサイレンのためであった。しかし、まだ、全部の人びとが、サイレンに気づいてはいなかった。昼間の労働でつかれ切っていた女たちの中には、死んだように寝ている者もあった。うつつらと耳の奥でサイレンをきいても、何か異状があった、とは思うものの、大事故が起きていよう

とは考えていなかった。

一時三十分ごろであった。二番方の鉦夫の多い丘の上の炭住へ、採鉦課の課員で栗田という若い男が走ってきた。どういうわけか、栗田課員は、長屋のかかり口にある第一棟の三番目にある瀬尾の家の戸をたたいている。

「おばしゃん、起きとんな、鉦山で水が出ちよるたい」

栗田は大声でいった。ちかははね起きた。土間に立っていた男がすぐ表に消え、次の棟にゆく足音がきこえた。

「とき、さよ」

ちかは六畳にどなった。

「水が出たよ」

しかし、まだ、瀬尾家の女たちには、何のことやらわからなかったのである。

二番方の炭住長屋から、人びとが坑口にかけてつけたのは、一時三十分から二時のあいだであった。みんなは黒いモンペに木綿もめんのブラウスをひっかけたり、寝巻のままだったり、年寄りの中には、上半身を半裸のまま飛び出てきたりしたものもいた。縄のはられた坑口から三十メートルほどはなれたトロッコ道の坑木の積んである箇所、ひとかたまりになって穴の方をみていた。

誰もが物をいわなかった。じいっと穴の方をみつめていた。水の音は、穴の奥から、ごろごろわんわんというようなひびきをたててきこえてくる。その中を、一人一人、ずぶぬれになった鉦夫たちが上がってきた。

沢の谷と池の谷の炭層へ、その夜は百五十名の二番方が下りていた。鉦夫たちはぞくぞくと本卸しと六片通路の交叉点に集まって、そこから職員の指図さしずをうけ、エンドレスの炭車にのって坑外へ出てくるのだが、泥水でよごれた顔はどの顔も蒼黒あおくろく、恐怖におののいていた。穴から出てくるとき、

「うちんたア、大丈夫じゃろか、どげえね」

という女たちの声がふりかかった。上がってくる職員たちは、それにいちいちこたえていた。

「大丈夫やろうけん、安心しときないや」

しかし、鉦夫たちの返答は少しちがっていた。

「あんたとこはよう見とらんやったばってん。まあ、そう、心配ばしなさんな」

絶望であるということが鉦夫たちの眼の奥に光っているのを、家族の者たちは夜のことだから見分けがきかなかったのである。しかし、池の谷層の二番方の家族たちは、穴から出てくる鉦夫たちが、いずれも沢の谷の連中ばかりであることに気づくと、不安はつのつてきた。しかし、まだ、悲劇感というものはなかった。

この時間には、すでに、地底の池の谷層は汚水が充満していた。逆流してきた水はやがて沢の谷層の連中が通過した六片をも充みたし、本卸しから沢の谷層に音をたてて流れこんでいた。六片道は、H字型に、沢の谷坑道と池の谷坑道を結ぶ通路である。この道を通った水は、両方の坑道に流れ落ち、沢の谷よりも百メートルばかり地表から深度をもつ池の谷層にまず充満した。

九十一人目に坑口をはい上がってきた鉦夫は、林田という二十七の男であった。彼は池の谷層

の底から、顎の下まできた水の中をくぐって、ようやく這いあがってきていた。

林田は坑口につくとべたりと腰を落とした。白眼をむいて横に倒れた。職員と保安員が担架をもってかけつけた。

「もう、だあれも上がって来らん、生きた心地がせん」

彼は蚊のなくような小さなふるえ声をだした。失神した。午前三時である。

坑口に立って、奥の方から光ってくるヘルメットのキャップランプを待っていても、それから誰も上がってこなかった。水が坑口近くまでふきあげてきたのは三時五十分だった。

池の谷層の五十九名の遭難は確定的と見られた。それまで、だまって坑木のわきの縄をはられた中で、じいーっと見守っていた家族の者たちは、職員たちの制するのもしきかず荒縄をたち切って坑口に走った。彼女たちの口ぐちから、父ちゃんという声がきこえた。水の中を走り入って奥をたしかめようとする者もいた。坑口で制止する職員の耳はつんざくような声で鼓膜をゆすぶられている。

「どうなっちゃうとね。はっきり云いんしゃい、はっきり云いんしゃい」

誰もが語気を半泣きにふるわせていた。月夜の空にその声は空虚にひびいた。

昭和三十一年九月十三日の明け方である。東南の空が白みはじめた頃で、英彦山はまだ濃灰色の空に溶けていて見えなかった。